

2019年7月14日 マルコ福音書 1:29-39 説教 黄昌性牧師

礼拝は愛そのものである。それはイエス・キリストが愛であるからである。礼拝から人間における愛の働きが展開する。2011年に東日本を襲った大震災により大きな被害を被った地域に福島県がある。8年が経過する今も、放射能の影響を心配していまだにこの地域の農作物を買わない、食べない人もいる。一方で、体に悪いとわかっているからお酒を飲みタバコを吸い、また副作用を知らず薬を服用している。礼拝を悔い改めの場所と考え、礼拝において我々は何を学ぶべきであろうか。私自身、福島県の農産物をもっと購入し食べるべきであったと悔い改めた。クリスチャンとして歩むことはどういうことであるかを考え反省したのである。さて、礼拝は魂と霊によって捧げるものである。マルコ福音書1章にはカファルナウムにおいてキリストが権威ある教えを表し、汚れた霊に取りつかれた人がイエス・キリストを指し「神の聖者だ」と証ししたことが記されている。マルコ1:29-39にはイエス・キリストが会堂から「出て行った」ことが記されている。会堂から出て新しい教えを宣べ伝えた。イエス・キリストはシモンの家に赴き、姑の病を癒すという「行動」による御力を示された。イエス・キリストはカファルナウムの会堂で教えたのちシモンの家でシモンの姑の病を癒し、その後ガリラヤの会堂で教えられた。御言葉と御業による出来事である。どうすればキリストの御心と御業を我々も成し遂げることができるのだろうか。キリストの価値観に似た価値観を持ち、キリストの創造をそのまま受け入れること、つまり愛の働きをまず私自身から、我々の群れから始めることである。それもキリストの権威のある新しい教えに倣うことである。今朝の御言葉における「悪霊」とは英訳して Devil である。ペトロの姑が家で横になっており、教会ではなく家における癒しが記されている。聖書は科学的、論理的な組み立てによって成り立っており、祝福も論理的なことである。「霊と真の礼拝」、つまり「聖書の世界」と、「今現在の我々の

世界」がつながっていることに気づきそのまま御言葉を受け入れることである。29 節でカファルナウムの会堂から出た一行がペトロの家に行きそれからガリラヤの伝道を始められたという一連の出来事は、人間の捉える「時間」の中で起こった。つまり、①シモンの姑をイエス様が癒す②イエス様が朝早く祈っておられる③そして神の国が始まった(=イエス・キリストによる宣教の始まり)。これはまた、イエス・キリストの側からご覧になった「神の時間」の内になされたことである。イエス・キリストが人、この場合ペトロの姑のところへ行かれたことが大切である。これは Go Structure の姿である。礼拝することに集中することは重要であるが、同時に身近にいる隣人、つまりその地域の農産物を購入することで神様の愛を表すことも必要である。21 節には権威ある教え、その後 31 節には病の癒しについて記されている。32 節「夕方になって日が沈むと人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れて来た。」なぜ夕方に癒しが起こったかという、安息日に癒すことは認められていなかったためである。人々は夕方にイエス様のもとに来れば癒してもらえると、夕方をチャンスと捉えていた。事実、町中の人々が戸口に集まってきており、その人々は飢え渴いていた。毎週のように礼拝をしているにもかかわらず、彼らは新しい教え、真の教えに飢え渴き、出来事における主イエスの御力を待ちわびていた。人々のうわさによりキリストの内にある神様の力が知れ渡っていった。30 節のシモンの姑の病の記述にはギリシャ語で「デ」という単語が用いられているが（新共同訳ではその訳が省かれている）、それは逆説的な言葉である。ルカ福音書に記されている同じ場面には「高い熱」に苦しめられていたシモンの姑の姿がある。姑は罪の結果としての病に苦しんでいたと捉えられる。シモンの姑は深刻な何かしらの問題のために高い熱にうなされていた。今朝の 31 節の描写を見ると、イエス・キリストがシモンの姑の手を取り、起こしている。ギリシャ語の「エギルー」が用いられており、これは「死から起こす」という意味である。

つまり単なる病でなく、イエス様はシモンの姑を死の病から甦らせられたのである。イエス様による病が癒されたシモンの姑は、イエス様の権威ある教えを聞きに集まってきた人々をもてなすという奉仕を行う人に変えられた。シモンの姑は寝ていたが、それは罪に打ちひしがれている姿であった。何か問題があって倒れていたのである。人は時に罪に倒れているとき、イエス・キリストの力なしに一人で起き上がることができると思込むことがある。そのようなときにイエス・キリストは「そのあなたの考えを手放しなさい」と言われる。神様を礼拝していても恵みを感じられず心に平安が得られないならば、礼拝において、これまでの自分の真の姿を顧みつつ、これからあるべき、ありたい自分の姿を思い描くことである。なぜなら、イエス・キリストは人間が無力であることを知っているからである。祝福を受けるにはキリストの手をつかみ、起こしていただくことである。「気に病む」という言葉があるが、それは文字通り、体は元気であるが心が病んでいる状態のことである。心の病が癒されるには、生活の中においてキリストと共にいて我々の手をつかんで起き上がらせてくださることを信じることである。イエス・キリストは我々のもとに立ち止まってくださる。その時我々は神様への黙想の内にキリストが来てくださることを待ち望むのである。34節「イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし」イエス・キリストは言葉のみでなく、カファルナウム(会堂)やガリラヤ(シモンの姑および会堂)において悪霊を追い出した。癒された人々には、イエス・キリストのもとに行って病を治していただくという勇気があった。もし我々の内に体と心に病があるならば、イエス・キリストのもとに行って癒してください、と願う勇気が必要である。イエス・キリストは大勢の人々を癒し悪霊を追い出された。34節「また、多くの悪霊を追い出して、悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。悪霊はイエスを知っていたからである。」イエス・キリストは言葉と業の宣教を行われた。ここに、悪霊にものを言わせないキリスト、悪霊

が力をふるうことを許さないキリストを見ることが出来る。悪霊によって汚れていることを認識する作業には祈りが必要である。罪、悪、怒り、他人を裁く心を捨て、祈りの内に神に立ち返る作業をするのである。どのようにすればよいのか。イエス・キリストを見ることが出来る。ところで、人間がもし悪霊に憑りつかれていたとして、その人が悪霊から解放され問題が解決したのなら、なぜイエス・キリストが十字架にかかり死ななければならなかったのであろうか。それは、人間は癒されただけでは救われないからである。癒され、神様を継続して賛美することが必要なのである。イエス・キリストは、人間の罪をご自分の身にすべて負われ愛を示してくださった。35節「朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。」キリストは常に祈っておられた。祈っておられたところは寂しい場所、例えば荒れ野であった。イエス様がそうされたように、我々も、救われた人たちのところではなく、まだ救われていない人たちのところ(寂しいところ)で祈るべきである。シモンの姑は危機的な状況にあった。その寂しいところにおけるキリストの無言の祈りがシモンの姑を癒し救ったのである。神様のための働きはバラエティに富む。マルコ福音書は私たちに、目で見えるキリストの姿だけでなく、目に見えない中にキリストの真の姿を探しなさいと促している。実際、キリストのもとに集まった群衆は、イエス・キリストの癒しを求めて探した。しかし、奇跡や癒しの業が神様の本質ではなく、神様の言葉、つまりイエス・キリストご自身が神の本質であり、そのイエス・キリストが十字架で死なれ復活された出来事がすべてなのである。39節「そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。」イエス・キリストが御言葉を宣べ伝えられたように、我々も神の言葉を伝えなければならない。ところでイエス・キリストはご自分の体が教会であるということを宣べ伝えたのであろうか。そうではなく、旧約聖書の教えにあるとおり、会堂において旧約聖書の御言葉を一つ一つ教えたのである。カファルナウムが

らガリラヤへの福音伝道において癒しの業と神の言葉の伝播が成し遂げられた。我々は神の家である教会において、御言葉や音楽に触れなくても、ただ礼拝堂に入るだけで心が安らぐ経験をする。無論祈りは必要であるが、その前に我々の他者との交わりや関わりの中に本当の愛があるかを吟味する必要がある。前述した、ある特定の地域の農産物を敬遠することのような言動は、我々の内に未だ残る罪を指摘しているかもしれない。イエス・キリストを信じることは手段や目的ではない。クリスチャンはイエス・キリストの十字架に自らを委ねた者であり、自分に死んだ者である。そして礼拝にキリストの權威を感じ、十字架を見上げて「わが家に戻った」と感じる者たちなのである。そして、イエス・キリストを信じることは、他者を信じることでもあるのである。